

古典の鑑賞

短歌講座 ■ テキスト 5

日本文化スクール

短 歌 講 座

テキスト 5 古 典 の 鑑 賞

発行所 日本文化スクール
東京都新宿区百人町 2-1-11
(〒169)

発行人 品 川 實

印刷所 凸版印刷株式会社
組 版 東京タイプレスセンター

911

テキスト 5

古典の鑑賞

万葉集を初め、古今集、新古今集などの古典の名歌を学びます。長い伝統に支えられた和歌の世界を知ること、これからの作歌人生の大きな励みになることでしょう。

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一章	万葉集	3
第一節	万葉の自然歌	4
第二節	万葉の相聞歌	13
第三節	万葉の挽歌	26
第四節	万葉の生活の歌	37
第五節	万葉の旅の歌	48
第二章	古今集	54
第一節	新撰万葉集から古今集へ	54
第二節	古今集の自然歌	56
第三節	古今集の相聞歌	63
第三章	勅撰集期	70
第一節	後撰集	71
第二節	拾遺集	73
第三節	後拾遺集	73
第四章	新古今集	83
第一節	新古今集の成立まで	83
第二節	新古今集の作者と歌	87
第五章	近世の和歌	96

万葉集

わが国では短歌は形は小さいながらも、古代から一貫して重んじられてきており、幸いにも脈々として絶えることなく時代を反映してきたのです。いつの時代も短歌が主流であったとはいえませんが、主として短歌によって日本詩歌のあとをたどることができる点は、他の分野と比べて、日本文学の特質といえるでしょう。

わが国の最初の古典としてあげるものに万葉集があります。この『万葉集』という歌集名については諸説があり、一説には決めがたいのですが、万は多いということを意味し、葉は言の葉という略であり、木の葉の比喻で「よろずのことの葉」という意味であると解するのが、出典からいって正しいとみていいのではないのでしょうか。また、葉を世の意にとり、万代に伝うべき書と解している国学者もあります。

現在は二十巻になっていますが、成立の上からは必ずしも現在のままが原型とはいいがたく、賀茂真淵は、現在の巻一、巻二、巻十一、十二、十三、十四の六巻から成立していたと見ており、古くから諸説があります。

万葉集の歌は約四千五百首あり、数え方によって異なりますが、それは類歌を一首に数えるか否かによるので、^{*}国歌大観は四千五百十六首となっています。この国歌大観には番号がついており、それを一般に大観番号として用いることになっています。

年代は明記されたものによれば仁徳天皇の時代の磐姫皇后のお歌から淳仁天皇の天平宝字三年まで四百五十年間にわたっています。歌と数が多くなるのは舒明天皇（六二九年）からです。前記天平宝字三年（七五九年）までの主とした約百三十年のことになります。万葉時代というところの間のことをさすのですが、これ以前に記紀歌謡の時代があります。これは日本の抒情詩の母胎となるものであって、万葉に至って初めて優れた抒情歌が成立

^{*}国歌大観 松下大三郎、渡辺文雄編集によって明治三十四年から三十六年にかけて刊行された和歌の索引集。正統二冊から成り、万葉集、二十一代集、新葉集、および史書、日記、随筆、物語などの中の和歌が網羅されている。歌に通し番号をつけたことによって短歌における歌の位置が安定し、その番号を大観番号として共通に用いることができる。

万葉の自然歌

し、また記録として残ったのであって、記紀歌謡の時代は口誦によって伝わった時代ですから、一応は必ずすことにして、万葉期を三期あるいは四期に分けてみるとはつきりしてきます。

その前に大づかみに初期万葉と万葉時代に分けてみることも必要です。初期万葉時代は記紀時代と交錯しているところがあり、また万葉の最後の人である大伴家持は天平宝字三年から三十年も生きのびたのでありますから、万葉時代を延暦四年（七八五年）まで延ばして、平城天皇の時代に成ったとする見方も生ずることを知っておいてよいと思います。

いうまでもなく日本は海洋国であり、高温多湿の風土です。四面が海に囲まれて海岸線の長い島国であり、加えて地形の高低が著しく、四季変化に富んでいます。

万葉集の地盤となった大和の一带は山国で、山を中心として吉野川や紀伊の海岸や琵琶湖の水を配して詠まれています。大和という地名が示すように山が多くあるということであり、周囲が山に囲まれていてどこに出るにも山を越えなければなりません。殊に南方と東方に深い山を控えて盆地をなす中央部に大和三山といわれる畝傍山・香具山・耳成山があり、このあたりを中心地としている万葉集は山間文学といっていいでしょう。

しかし万葉集は大和地方だけで詠まれたわけではなく、大和を中心として東は伊勢から東海道を経て東国に、北は山城・近江から越中に及び、西は摂津から中国地方を経て九州に至っており、南は紀伊国にわたったの歌があります。

「大和には群山あれど」といわれる山々はさきの三山の他に三輪山があります。さらにあげていくと弓月嶽・巻向山・穴師山・多武峯・倉橋山・二上山・吉野山とあり、それぞれに風景として山の美しさを持つと同時に信仰の対象となり、また信仰の場としての性質を持っています。この山々の間を流れる川に吉野川・飛鳥川・初瀬川・佐保川などがあり、その間に水たまりのような埴安池や、水がたぎって滝をなすところもあって、微妙な

山と水とのかかわりが見られます。

これらの地形が人々に与えたものは同時に、そこで展開した歴史的風土として歌の上にも反映していきました。人間の動きを歴史的に見ますと、壬申の乱（六七二年）が終わって天武天皇の御代までを初期万葉として、その後人麻呂の活躍した持統天皇のころを藤原宮時代として、その後の社会情勢が変わってきたところからを奈良時代と分けてみると、同じ自然でもまた同じ人であっても自然の受け取り方が大分変わってきています。

一 柿本人麻呂の自然歌

初期の万葉には歌謡のころの神話につながるところがあります。人麻呂はこの神話と人間をつなぐ歌を作った人ともいえます。

人麻呂の生没の年は未詳で、その生涯の一部を除いては不明の点が多いのですが、明白でない伝記のうちに推測として、奈良時代以前に奈良の南方の櫛本付近に居住した春日氏の支流に柿本氏があり、人麻呂も多分この一統であろうといわれています。

天武天皇のころ柿本の瓊さきという人があり、人麻呂の父か兄であったかもしれないとの説もあります。舎人*とねりという説があり、草壁皇太子（日並皇子ひなめしのみこ、父は天武天皇、母は持統天皇）に仕え、皇子没後高市皇子（父は天武天皇、母は胸形尼子娘むながたあまのおとめ）に仕えました。この両皇子は共に壬申の乱に天武天皇に従って戦っています。

持統天皇の時代となり、人麻呂は諸方に扈從*とじやうして、直接に自然に触れてたくさんのおい歌を残しました。

万葉集一〇八八

あしひきの山河の瀬の響なるなへに弓月ゆづきが嶽たけに雲立ち渡る

*舎人 大化前代、天皇または皇族などに近侍して雑事を掌ったもの。

*扈從 つき従うこと。随行。

歌意——山中を流れる川の瀬が鳴り渡ると共に、弓月が嶽に雲が立ち渡ってくる。

「あしひき」は山や峯にかかる枕詞^{まくらことば}です。枕詞は語調を整えるために用いるので五音のものが多く、のちには「あしびき」と濁音にしますが、このころは清音で「あしひき」と発音しました。弓月が嶽は三輪山の東方に続く山で、標高五六五メートルです。「弓月」は斎槻の意で、大きな槻があるゆえに生じた名でしょう。高い山に巨木があり、昔の人はそこに神が降り立つとも考えたのです。

雄大な自然を動的に捉えて河の瀬に響くなかに、空を見上げると雲が一面に広がっていく。天と地と呼応して両者が（なへに、共に）同時に移動するなかに立って歌い上げてあります。

万葉集二三五

大君は神にしませば天雲^{あまぐも}の雷^{いかづち}の上にいはらせるかも

歌意——わが大君は神様でおいでになるので、天の雲の中にある雷の上^{いかづち}（雷の岳^{おか}）に仮宮をお作りになるのであります。

天武天皇か持統天皇か定めがたいのですが、明日香^{*}の宮に皇居があったところに、雷岳に行幸されたときに仮宮を作って宿られたのを、即座に歌にしたものです。雷が落ちたあとを雷岳といったのでしょう。そこに仮宮を作るということは異常な威力でなければならぬというあたり、人麻呂には神をあがめる気持ちがいっつもつきまとい、天皇に対しては現^{あら}つ神^{かみ}といい、自然に向かってはおごそかな、おかしがたい気持ちを抱いていたのです。この一首は荘重な歌調となっています。

ここで人麻呂について特に述べておきたいことは、人麻呂の歌は大変調子がいいということです。しかも調子の良さだけにとどまらず、はっきりした情景が浮かぶ個性的な歌であるのに注目しなければなりません。先に神話から人間の歌につないだ歌人であるといいましたが、いま一つ伝誦^{でんじゆ}文学から記載文学への道を開いた歌人であるということです。耳

*明日香 奈良盆地南部の一地方。

歌傍山および天香具山を結ぶ線以南の飛鳥川の扇状地。推古天皇以後百余年間の史跡に富む。

で聞いてもよくわかり、文字に書いても整った文学として、鑑賞するに十分に価する力を持った歌を成したのです。

二 山辺赤人の自然歌

万葉集の自然をみるときに忘れてはならない人に山辺赤人があります。赤人も生没年は未詳です。作品は聖武天皇時代で奈良時代中期の歌人です。官位が伝わっていませんが、聖武朝に軽い身分の官人として仕え従駕した他は自由な旅をして過ごしたようです。

山辺氏は播磨国で顕宗・仁賢天皇を見出した伊与部の小楯の子孫で、もと連姓であったが、天武天皇十三年に宿禰姓を賜ったとあります。

赤人の歌は清明な自然美を歌い上げ、繊細で澄明な歌風はあくまで自然にひたり、純化した叙景歌人として万葉集の特色をなし、平安朝の歌人にも自然鑑賞の上に大きな影響を与えました。

万葉集三一七

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布士の高嶺を 天の原 ふり放
け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり
時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言い継ぎ行かむ 不盡の高嶺は

反歌

万葉集三一八

田兒の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける

昔は富士山が煙を吐き続けていたのです。鎌倉期の西行の歌にも富士の煙を歌ったのがあります。「不盡」という字を用いたのは煙が絶えないという意味です。

わかりやすい歌ですので訳はいりませんが、構成が二段構えになっています。第一段で

*従駕 行幸（天皇が外出すること）に従って行くこと。

は目に見た通りの事実を述べ、第二段ではその感想を述べてあります。天地が分かれたときから引き続いて、この「ゆ」は時間的に用いてあります。

つまり駿河の国にある富士の高嶺を天上遙かに仰ぎ見る時の気持ち、昔天地もまだ渾沌としていたときからいいおこしているわけですが、その神さびた神としての性能を発揮して、崇高であり空を渡る太陽もそのかげにかくれ、白雲も逡巡する、それほど山が高く、雪の季節でないときも雪におおわれている清らかな姿を、いつまでも語りついでいきましよう——と歌っているのです。「不盡の高嶺は」と最後にいま一度念を押していかにも崇高な山の実相を写し、加えて自分の受けとり方を述べる際に日月を配し、雲に寄せて適切に表わして冗漫にならず、長歌としてはひきしまった形で名声の高い作品となっています。

反歌としての一首は、富士山を眺めるのに最も勝景の地とされている田子浦という一点をきっぱりと指定しています。田子浦は興津町よりの東の海浜で、この場合の「ゆ」はその地からとの意であり、「うち出でて見れば」で自分の体を使っての動作として表わし、眼前に開けてくる光景を効果的に捉えてあります。長歌で富士山の雄大さを説き、反歌ではその景にふれる瞬間を嘆声としてとどめて簡潔に描写してあります。

整った名歌として、海を控え東海の天にさわやかに立つ、日本の象徴としての富士にふさわしい長歌であり短歌ですが、この反歌だけを切り離しても十分絶唱といえます。

なお万葉集では作者不詳の富士山の歌が引き続き記されています。

万葉集三一九

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立て
る 不盡の高嶺は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も とびも上らず もゆる火を
雪もち消ち ふる雪を 火もち消ちつつ 言ひもえず 名づけも知らず 靈しくも い
ます神かも 石花の海と 名づけてあるも その山の 包める海ぞ 不盡河と 人の渡
るも その山の 水のたぎちぞ 日の本の やまとの国の 鎮とも いまます神かも 寶

とも　なれる山かも　駿河なる　不盡の高嶺は　見れど飽かぬかも

反歌

万葉集三二〇

不盡の嶺にふりおける雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

この歌は地理的な面から富士を取り上げてあり、赤人の時間的推移の歴史的見地から述べたのと違った見地によっているものです。

反歌に、富士の雪は年中消えないで年の半ばごろでも雪を置いているが、六月の十五日即ち極暑（陰曆による）の日にたとえ消えることがあっても、その夜にまた降るのである。とっているのは、大きく下界から仰ぎ見て神韻縹渺（なんともいえない趣のただよっているさま）とした赤人の歌に比べると、雪が消えるという現象だけにかかわって特色を出している点が、歌の捉え方として参考になります。

ちなみに富士山は今でも東海地方から見のを表富士とし、山梨県側から見のを裏見の富士としてそれぞれの特色が賞せられています。

万葉集一四二四

春の野にすみれつみにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける

これも赤人のわかりやすい歌です。すみれを摘みに来て、その野辺で一夜泊まってしまった。という意味で、この場合すみれは花をめではなくて、薬草として摘んだのだという説もあります。食用のすみれ菜とも、また染色用の目的であったともいわれます。いずれにしてもすみれ摘みのために一夜宿泊したというのは大げさですが、自然歌人といわれる赤人は長歌十三首、短歌三十六首あるうち、大部分が自然を歌ったものです。それは赤人の生き方として自然に心をひかれ、自然に対する目が他の人よりも現実生活に向けるよ

り多く深かったということになるのです。

万葉集九二五

ぬばたまの夜のふけぬれば久木おふる清き河原に千鳥しば鳴く

歌意——昼間見た景色を夜になって思い返すときに、河原と木立があるだけで他のなにものも消されています。ただ耳から聞こえる千鳥の声があるのみです。

千鳥の声を機縁として自分の印象に残った清らかな水辺に生い茂るひさぎ（楸）を点描し、扈從の役目からも解放された自由な気持ちがさやけさのなかに息づいています。「ぬばたま」は黒、夜に縁のある言葉にかかる枕詞。ぬばたまはいちはつ科の宿根草で、おとうぎ 楸ともいい、花はたいこう色で実は黒い玉を結ぶところから生じたのです。

ひさぎ（楸）は赤目柏あかめがしわともきささげともいわれています。山野に自生する落葉の喬木で赤目柏は夏のころ緑黄色の花をつけ、きささげは董色すいれに紫の斑点のある花をつけます。どちらにしてもひさぎという音は大変きれいな響きを持っています。

この歌は赤人が吉野の離宮に従駕した際の歌の反歌ですが、すっきりと独立しています。

三 大伴家持の自然歌

大伴家持は万葉集に作品も多く、編纂さんにもかかわっている人です。前者二人が生没未詳であったのに比べて、経歴のはっきりした名門の出生で、れい 霊龜二年（七一六年）生まれ、延暦四年（七八五年）没とされています。没年に異説はありますが、父は大伴旅人で、父に率いられて太宰府に赴き、当時筑前守であった山上憶良にも接しています。平城京に帰ってから父を失いました。

官職の最初は内舍人うちどねりとして聖武皇太子付になり、以後地方官として越中守、因幡守をつとめました。このときまでの歌が残り、そのあとは官位を除かれて流罪を受ける身となり

*内舍人 令制で、中務省に属する官。名家の子弟を選び、天皇の雑務や警護に当たる。

ます。

万葉集四四八四

さく花はうつろふ時ありあしひきの山菅すがの根し長くはありけり

これは兵部大輔つわものつかさおきすけという官職で残っている歌で、根の長いものとされていた山菅（りゅうのひげ）の花も衰えるときがあるのですと、武をもって仕えてきた大伴氏も斜陽となつて藤原氏の勢力にどうすることもできなくなつてきたのを、花に託して嘆じているのです。

二十三日、興に依りて作れる歌二首

万葉集四二九〇

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも

万葉集四二九一

わが屋戸やどのいささ群竹むらたけふく風の音のかそけきこの夕ゆふかも

二十五日作れる歌一首

万葉集四二九二

うらうらに照れる春日はるひに雲雀ひばりあがり情悲こころかなしも獨しおもへば

春日遅々として、ひばり正に啼く。悽惻せいちやくの意歌にあらずは撓はらひがたきのみ。よりてこの歌を作り、もちて締むすれたる緒を展ぶ。

さきの一首を心に持つてこの三首をみるとき、読む者に与える迫り方が違ふのを感じます。この三首は万葉集の十九巻の終わりの結びのところにおいてあります。

一首めは春の日は訪れてきて、野には霞がたなびく長閑さがみちみちて驚もしきりに鳴いており、心が浮きたつはずであるが自分の気持ちはうら哀しいと感傷的になっています。二首目は少しばかりの竹群に風が吹き渡るときの、かすかな音にいいがたいあわれを覚え、歌として表現しないではいけない作者の気持ちを占めている哀愁が感じられます。その翌日となるとうらかな春の日差しが照り渡って、のびやかに雲雀があがりおりしてさえずっているのに、心はやはり晴れやらぬ憂いにとざされているというのが三首目です。そして思わずも添えたのでしょう。『この春日遅々としているなかに心がほぐれなくて、想いのやり場がないが、自分には歌がある。昨日は自然に興が向くままに作ったのであった。独りし念えばという時に他のどんな形式でも叶えてくれない心遣りが歌の上でできるのです。』といわずにはいられなかったのでしょうか。

それが先にあげた（四四八四）になりますと、嘆きだけが先に立って、心のはずみが消えています。

万葉集四五一六

新しき年の始の初春の今日ふる雪のいや重け吉事

この一首で万葉集は完結し、最後の結びの歌になっています。このとき家持は因幡守でしたから、吉事を奏上するために作ったのです。内容は吉いことが重なりますようにというだけのこと、降る雪のまでが序詞です。（序詞は次の言葉を引き出すために用いるもので、字句の数に制限はありません。）

万葉集は二十巻に分け、最後の巻は防人の歌が集められているのですが、この一首は特に寿詞として添えられたものでしょう。雪の降る年は豊年といわれています。農耕の国として「雪は王穀の精」とか「豊年の貢」ともいわれています。雪が地をおおうことによって、虫害をおこす虫の卵が駆除されるということもありましょう。雪の降ることはいいことばかりではないのですが、初春の雪は瑞祥といわれていたのです。

*防人 古代、多くは東国から集められて筑紫、老岐、対馬など北九州の守備に当たった兵士。令には三年を一期として交替させる規定があった。

*瑞祥 めでたいしるし。

*恭仁京 七四〇年から七四四年までの都。現在の京都府相楽郡加茂・山城・木津町の木津川沿いの小盆地にあった。

*観照 美を直接認識すること。

第二節

万葉の相聞歌

*部立 部類あるいは部門に分けること。

ここで万葉集が生まれた歴史的背景を少し述べてみることにしましょう。壬申の乱は大化改新二十六年目に起こった皇位継承をめぐる争いでした。この動乱のあとに天武天皇が兄天智天皇と共になされた大化改新を更に一歩進めて律令制度を文書化し、普及することに力を用い、国家の体制確立を実質的にすすめられたのでした。そのあとをうけて皇后であつた持統天皇が立たれたときは、まだ大事業実現の波乱のあとの世情不安が残っていました。ここで律（刑罰）より令（規則）を重んじて、文化の面に衆目を転じさせようと考えました。ここに万葉集が登場してくる機運がかもされてきたのです。

柿本人麻呂は持統天皇のもとで天性の豊かな才能を思うままに、つまり文化国家の上昇期に心ゆくまで作歌したのです。山辺赤人になると、奈良に都があり都の規模は大きくなっています。即ち中期の人です。しかしこのころ聖武天皇は久邇京や難波京に都を遷そうとして、やがて恭仁京にしばらく（四年ほど）遷都されますが、地震があつたりして再び奈良（平城）に帰っていられます。赤人はそんな中で澄んだ気持ちで自然のなかに溶け込んで歌っています。大伴家持になると末期の歌人です。自然に対して観照性が加わり、世の動きも複雑となってゆくなかに、上昇期と違ったはつらつさのない、孤独な人間の哀しみにとざされています。それだけに素材を単純化し、表現に集中化が見られます。

このように、万葉集の自然をみると人麻呂は初期、赤人は中期、家持は末期の代表者といえます。

万葉集の部立は三つに分かれており、「相聞」はその一つです。「あいぎこえ」ともいい、相は交互を意味し、聞は意志を伝達することで消息を通じ合ったり、意見を交換することをさします。親子・兄弟・姉妹・友人間の場合もあり、男女間のこともあります。そのなかで男女間の恋情を歌ったものが中心とみられるのは、感情の高まりが激しく直接に響くものがあるからです。相聞といえは恋愛歌と解するのも否めないわけです。二十巻のうち

この部立に属するものは、二、四、八、九、十、十三にあり十一、十二、十四では相聞往来歌と称されています。相聞の語は漢文からきたものです。

一 額田王の相聞歌

大海人皇子と額田王との唱和は万葉集を飾る愛の絶唱歌とされています。

万葉集二〇

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王

歌意——あかねさす（枕詞）紫草が生えていて、入ることを禁じられている野を行ったり来たりして、あなたが袖を振っていらっしゃるのを、野守である天智天皇が見つけれられるといけませんですよ。

万葉集二一

むらさきのにほへる妹を憎くあらば人づまゆゑに吾恋ひめやも

大海人皇子

歌意——紫草のようににおいやかな美しいあなたに対して憎いと思えるならば、すでに人妻であるあなたを恋しく思うものですか。恋しく思わないでいられないのです。

ときは天智天皇七年（六六八年）五月五日のことで、場所は蒲生野（近江）です。この天武天皇がまだ皇太子のときに天智天皇が催された狩猟の日のできごとです。これは年中行事の一つで、皇族群臣こぞって供奉したのですから、公的な場の唱和、相聞歌です。この歌が壬申の乱の起こる因をなしたと深刻な事件歌として扱われますが、真の「相聞」の部は巻二に置かれているのですから、古代の宮廷生活をどのように理解するにかかるといえます。とにかく、巻一の巻頭近くにあるこの唱和は万葉を彩る圧巻なものです。

*野守 野を守る人、特に禁猟の野を守る番人。

額田王は日本書紀に天武天皇の後、妃、夫人をあげたあとに、「天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり」と伝えられているだけで他に記録はなく、謎の多い女性です。歌も多くは伝わらず、長歌三首、短歌十首（内重出一首あり）が残っています。この数少ない歌が額田王を知る全貌であり、手がかりですが、どの歌も豊麗な詩句が高雅な情操を偲ばせ熱情と冷静さを秘めた魅力に富んでいるのが特色です。

大海人皇子は舒明天皇の皇子で、母は皇極（斉明）天皇、兄は天智天皇で、天皇の病が重くなったとき皇太子を辞し、吉野にこもられたのです。このとき弘文天皇が位につかれましたが壬申の乱となり、弘文天皇は世を早く去り大海人皇子が位につかれました。これが天武天皇です。

万葉集二七

淑き人の良しと吉く見て好しと言ひし芳野よく見よき人よく見つ

天武天皇

思い出多い吉野に天皇が幸されたときの歌です。歌句によきをおいてあります。淑、良、吉、好、芳の五字を用いてあり、よきということは日本語では美の場合もあり、善をさすこともあり、すべて優れたものをよいということです。四句によく見よと命令形にしてあります。新しく天皇になり、皇后や皇子にかつて尊ぶべき人々がよいところであるといったこの吉野を、私もよく見るがみんなもよく見なさい、といわれたのです。異腹の皇子方も多いこと、将来のことを考えて心情を述べられたのでしょう。どこか明快な調子が出てあり、よの字の繰り返しも語尾を変化させて重複のわずらわしさをさけてあるなど、快適な響きがあって、天武天皇もよき歌人であられたことが偲べれます。

かつての若き日に額田王はこの天皇の皇女を産み、そのあとに次のように歌っています。

万葉集一七

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積るま